

幻住庵の由来、庵に入る
ことになつたきさつ、庵
からの眺望、また日々の生
活、人生観などが記され、

表した俳文である。

芭蕉が生前に唯一

江戸時代前期の俳人松尾

芭蕉（一六四四～九四）は、
代表作『奥の細道』の旅を
終えた翌年、元禄三年（一
六九〇）四月六日から七月

二十三日までの間、近江国
国分山の中腹にある幻住庵

に滞在した。幻住庵は門人

曲翠が、伯父・幻住老人の

旧庵を修理して芭蕉に提供

したもの。

本作は、芭蕉が約四カ月

を過ごしたこの幻住庵につ

いての記で、生前に唯一公

表した俳文である。

◆芭蕉が生前に唯一 公表した俳文

芭蕉が庵での生活を心から
楽しんでいた様子を感じと
ることができる。そうした
日々の中で、自身の半生を
振り返り、俳諧の道への思
いを語る終盤は特に有名で
ある。

幻住庵滞在中に企画され
た『猿蓑』（門人去來・凡兆
編集。元禄四年七月刊行）
は、句集と文集から成る予
定であったが、芭蕉の意向
により俳文は『幻住庵記』
一編のみの収録となつた。

芭蕉は刊行に向けて、門
人等に意見を求め、練り直
して何度も原稿を書き改め
た。本書の巻末に貼付され
ている門人支考の『奥書』
には、「初の草稿は洛の去
来にあり、第二の草稿は此

（天理図書館 濑川浩子）

<天理図書館のお知らせ>

Tel 0743-63-9200 URL <https://www.tcl.gr.jp/>

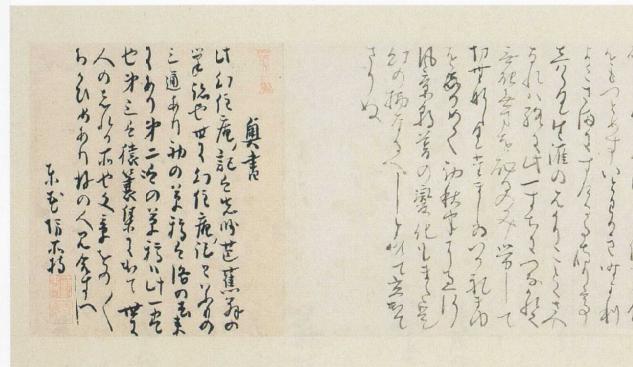
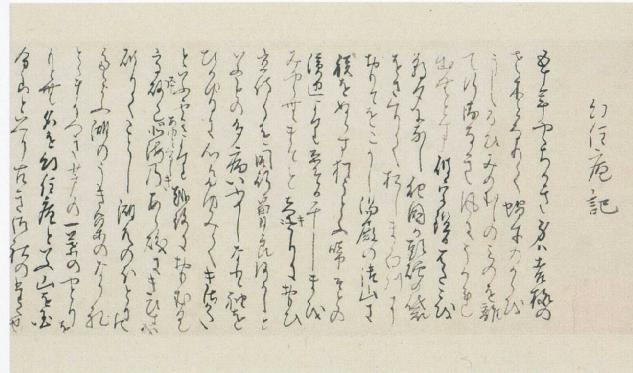
◇平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）

○本書は、天理参考館で10月23日～12月2日開催の「芭蕉の根源—北村季吟生誕四百年によせて—」に出品します。

※最新の情報については公式HP、X（旧Twitter）でご確認ください。

一卷也。第三は猿蓑集に出
て世に人のしれる所也」と
あり「幻住庵記」の原稿を
三種（初稿・再稿・定稿）
挙げる。現在では、その他
にも草稿のあつたことが知
られている。

本書はそのうち芭蕉が庵
を離れる前後、七月中下旬
頃に書いたとされている再
稿本で、旧蔵者の名から米
沢本との称もある。芭蕉自
筆稿本の中で整った成案と
されるが、更によりよい文
章にするための苦心の跡だ
ろうか、言葉の付加、また
訂正などの箇所がある。原
稿完成への過程をたどるこ
とができる貴重な資料とな
っている。



►【げんじゅうあんき】

松尾芭蕉自筆 1軸

元禄3（1690）年頃

縦14.9cm 横150.2cm（本紙）



幻住庵記

やまとこの名品